

小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析

廣岡 秀一¹⁾・横矢 祥代²⁾

**An exploratory study for finding factors affecting social norms
among elementary school, junior high school, and high school students**

Shuichi HIROOKA and Sachiyo YOKOYA

要 旨

本研究は、子どもの規範意識の実態を把握することと、日常生活に関する意識から規範意識が影響を受けている関係を探ることを目的とした。三重県内の小学生・中学生・高校生を対象に、日常生活で経験する可能性のあることがらについての社会的ルールや規則に対する認知を調査した結果、学年が上がるにつれて規範意識が低下すること、違法・暴力行動や迷惑行動に対する規範意識は、男子は学年が上がるほど低下するが、女子は中1～中2以降は低下しないということ、遊びや快楽を追求する行動に対する規範意識は女子の方が低いことを見出した。さらに、日常生活に関する意識と規範意識の関連を検討したところ、小学生は、一般的な大人にポジティブなイメージを抱いているほど規範意識が高いこと、中・高生は、大人から自分の行動を正当に評価してほしいと思っているほど規範意識が高いことが明らかになった。次に、学校で適応できていることが高い規範意識につながることで、中・高生は、友人関係が良好なことが規範意識にネガティブな影響を与える可能性があること、さらに、友人関係が良好で学校に適応できていると感じていると規範意識が高いことが明らかになった。また、将来に見通しを持ち、自分の学習や社会的な活動に意味を見出していることが規範意識にポジティブな影響を与えることが明らかになった。

Key words : 規範意識、社会的ルール、社会規範、日常生活に関する意識

問題と目的

文部科学省調査によると、三重県の暴力行為の発生件数は、過去数年、常に上位に位置している。また、最近の事件の特徴として、「ふつうの子」が突如として暴力事件を起こすなど、問題行動が一般化・大衆化していると言われている。このように多くの児童・生徒が問題行動を起こす可能性があるのは、児童・生徒が他者から期待される行動を遂行するために必要な規範意識を内面化していない、もしくは教師や親、それらを取り巻く社会が期待する内容とは異なった独自の規範意識を形成している可能性が考えられる。従って、現代の児童・生徒の規範意識の実態を明らかにすることは、学校教育のみならず、社会的にも重要な課題と

なるだろう。

そこで、本研究は規範意識を「小学生・中学生・高校生が1日の生活において経験する可能性があることがらについて、多くの人々が共有し、かつ暗黙のうちに仮定している規則（ルール・マナー・習慣・伝統）、及びそれに関連する感情的反応、または行動的反応」と定義し、以下の目的をもった調査研究を行った。

1. 規範意識の発達的变化と性差

規範意識の発達的な変化を調査した研究の多くは、その変化を短い期間でしか検討していない。例えば、原田・鈴木(2000)や小嶋・松田(1999)では、中学1年生から3年生までの規範意識の変化を調査してい

1) 三重大大学教育学部 e-mail: shuhiro@edu, mie-u, ac, jp

2) 三重大大学高等教育創造開発センター e-mail: yokoya@hedc, mie-u, ac, jp

るものの、高校生や大学生、大人との比較はしておらず、規範意識の発達過程を検討していない。様々な要因から影響を受けていると考えられる児童期から青年期は、規範意識も同様に様々な要因から影響を受け、大きく変化すると思われる。このようなことから、児童期から青年期の発達段階を対象とした研究も重要であろう。さらに、中学生・高校生・大学生の規範意識について検討した研究が多くみられるのに対し、小学生の規範意識を取り扱った研究はそれほど多くはない。本研究のデータは、横断的ではあるものの、小学5年生から高校3年生の子どもを対象としているため、規範意識の発達の的な変化を明らかにすることができると考えられる。

また、規範意識研究の中には性差について検討しているものが多い。小嶋・松田(1999)は、女子よりも男子の方が暴力得点、加害得点、被害得点が高いが、逸脱欲求得点は、女子の方が高いことを見出している。つまり男子の方が暴力への欲求が高く、実際そのような行為に加害者の立場、被害者の立場、もしくはその両方の立場で関わっている経験が多い。一方、暴力以外の逸脱行為に対する欲求は、女子の方が強いという結果である。また、大学生を対象とした規範意識研究では、男子大学生より女子大学生の方が全般的にきびしい規範行為の基準を持っていた(安藤, 1992)のに対し、高校生を対象に同様の質問紙調査を行ったところ、規範からの逸脱に対する許容度に女子高校生と男子高校生の差はまったくみられないという結果が見出されている(安藤, 1993)。このように、規範意識は単に男女で差があるというだけではなく、その規範意識の種類によっても異なるようである。

目的1: 本研究は、子どもの規範意識についての実態調査を行う。具体的には、小学生・中学生・高校生を対象に、自分と同年代の子どもが日常生活で経験する可能性のある一般的に望ましくないとされる行動に対して、どの程度「してはいけない」と認知しているのかに加え、一般的に望ましいとされる行動に対して、どの程度「すべきである」と認知しているのかについて明らかにすることを第1の目的とする。その際、学年や性による違いも含めて明らかにする。

2. 規範意識と関連する生活意識要因

規範意識は、様々な要因から影響を受けていると考えられる。以下は、規範意識と関連すると考えられる様々な生活意識の要因について述べる。

2-1. 規範意識と大人に対する態度

子どもが、大きく影響を受けるもののひとつに、保護者や先生など身近な大人の存在が考えられるだろう。長崎県教育センター(2002)によると、家の人に積極的な関わりを期待している(例えば、自分のことを理解してほしいなど)児童・生徒は、規範意識が全般的に高く、一方、家の人の誠実でない行動を改めてほしいと期待している(例えば、言うことがころころ変わらないでほしいなど)児童・生徒は、規範意識が低いという結果であった。このことから、大人に対して何らかの期待をすることと規範意識には関連がある可能性が高い。これは、保護者と同じく身近にいる大人として、先生に対する期待も同様のことがいえるだろう。また、本研究では、身近にいる大人だけではなく、一般的な大人に対して抱いているイメージが規範意識に与える影響も含め検討する。というのも、大人に対してネガティブなイメージを持っていると、反発心から規範からの逸脱行為を引き起こす可能性があると考えられ、一方、ポジティブなイメージを持っていることが規範的な行動を促す要因となる可能性があるからである。

以上のことから、規範意識と児童・生徒の大人に対する態度の関係を明らかにする。

2-2. 規範意識と生活環境

子どもが主に生活している場所は、「家庭」や「地域」、「学校」である。以下は、規範意識と環境要因の関連、及び規範意識と生活の充実感との関連を述べる。

(1) 家庭での生活、近所の人との関わり

長崎県教育センター(2002)は、家庭生活を楽しんでいると回答した児童・生徒は、楽しくないと回答した児童・生徒よりも規範意識が全般的に高いこと、毎朝家の人とあいさつする子どもは、そうでない子どもよりも規範意識が高いことを明らかにしている。同様に、地域の教育力という視点から、近所の人との関わりと規範意識の関連についても言及している。このように、児童・生徒の規範意識を考えると、親や近所の大人が普段の生活において子どもと積極的にやりとりしていることは、非常に重要であろう。例えば、毎朝「おはよう」と家族とあいさつを交わす子どもは、「人と会ったときにはあいさつをする」という意識や態度を生み、あいさつをすることが自然に身につく、社会の中で適応的な関係を構築することが容易になると考えられるからである。

以上のことから、規範意識と家の人や地域の人との関わりとの関係を明らかにする。

(2) 学校生活(学校適応感と友人関係)

小嶋・松田(1999)によると、学校に対して、否定

的な中学生は、暴力や逸脱行動に対する欲求が高いこと、そのような行為は悪くないと認識していること、「いじめ」と何らかの関わりがあること、実際に逸脱行為をする可能性が高いことを明らかにし、学校からの逸脱傾向と暴力や逸脱行為などの非行行為がかなり関連していると述べている。このように、学校生活に関する意識が規範意識に影響を及ぼしていると考えられる。

中でも、児童・生徒の学校生活で最も重要な要因として、「自分には友だちがいる」と認知していることや「その友だちとの関係が良好である」と認知していることが考えられる。家の人や先生などの大人から受ける影響よりも友人から受ける影響の方が大きくなることが青年期初期の中学生・高校生の特徴であると考え、彼らはただ単に善悪ではなく、友人との間のルールや価値観が優先して判断する方向に強く動かされる。また、中学生・高校生の青年期初期の特徴として、自我を確立するために、親や先生など身近な大人に一時的に反発することが発達の特徴だと考えると、友人関係の良好さが大人に対する反発を増大させ、規範からの逸脱行為に及んでしまうとも考えられる。

さらに小嶋・松田(1999)は、学校に適応的でなく、友だちともうまくやっていけない孤立型の中学生は、規範の崩れや加害、逸脱行為の各得点が高いということを明らかにしている。このことから、学校での適応と友人関係が規範意識に影響を与えていると考えられる。

以上のことから、規範意識と学校適応感・友人関係との関係を明らかにする。

(3) 生活充実感

学校での勉強や先生や友人との関係、さらに家庭での楽しさなど、それらを包括して、全体的に生活が充実しているとの実感が持てるかどうかは、中学生や高校生にとって、重要であろう。大野(1984)は、充実感が青年期の健康的なアイデンティティに影響を与えているということを明らかにしている。このようなことから、中学生・高校生の生活における充実感と規範意識の関連についても検討すべきであると考えられる。

2-3. 規範意識と将来展望、社会考慮

青年期は、時間的展望の長さや広がりを持ち、近い将来のことだけでなく、遠い将来のことについても考えることができるようになることや、現実的に将来のことを考えることができるようになることから、時間的展望の獲得は重要な発達課題としてあげられている(白井, 1991)。将来の展望を持つことができれば、「今がよければいい」と目先の欲求や快楽を追求する衝動的な行動をコントロールできるようになるのでは

ないかと考えられる。つまり、時間的展望の獲得は欲求を追求するような行動に対する規範意識と何らかの関連があるということである。将来の展望を持つという要因が、進路や職業の選択を控えている中学生や高校生にとって自己の確立に大きな影響を与え、また自己の判断基準の発達にもつながるような非常に重要な概念であると考えられる。

また、自己だけでなく、自分の所属する社会に対しても見通しを持ったり、関心を抱いたりすることも重要だろう。例えば、斎藤(1999)は、個人の生活空間を「社会」として意識できている社会考慮の高い人は、「ルール・マナー違反」に属する迷惑行動に対して迷惑認知が高いことを明らかにしている。また、吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折(1999)は、社会考慮が高い人は、冠婚葬祭における迷惑行動に対する許容度が低いということも明らかにしている。つまり、迷惑行動やマナー違反のような行為を不快に感じるには、社会というものを考えようとする態度が必要であるといえよう。

以上のことから、規範意識と将来展望、社会考慮の関係を明らかにする。

目的2: 本研究は、子どもが普段生活していく上で、規範意識に大きな影響を与えるだろうと考えられる8つの要因(「家庭での生活・近所の人との関わり」、「家の人への期待」、「先生への期待」、「大人に対するイメージ」、「学校適応感」、「友人関係」、「将来展望」、「生活充実感」)を生活関連意識要因とし、規範意識との関係を明らかにすることを第2の目的とする。

方 法

調査対象: 三重県内の小学校88校、中学校74校、高等学校29校に在籍する小学校5・6年生、中学校1～3年生、高等学校1～3年生を対象に質問紙調査を行った。質問紙の配付数、及び抽出率はTable 1の通りである。

調査時期: 平成16年9月7日～9月17日

質問紙の構成: ①規範意識尺度30項目(小学生は21項目)。「学校内規範意識」、「学校外規範意識」、「向社会的行動」の3つの観点から構成。項目は、長崎県教育センター(2002)、原田・鈴木(2000)、関水(2002)、高旗・國吉(2001)、横塚(1990)、菊池(1988)を参考に作成した。

②生活関連意識52項目(小学生は30項目)。「家庭での生活・近所の人との関わり」、「家の人への期待」、「先生への期待」、「大人に対するイメージ」、「学校

Table 1 質問紙の配付数と抽出率

	小 学 校		中 学 校			高 等 学 校			合 計
	5 年 生	6 年 生	1 年 生	2 年 生	3 年 生	1 年 生	2 年 生	3 年 生	
配付数	2,294	2,293	2,248	2,294	2,335	2,279	2,309	2,295	18,347
児童生徒数（人）※	18,265	18,463	18,531	18,652	19,304	18,666	18,291	18,202	148,374
抽出率（％）	12.6	12.4	12.1	12.3	12.1	12.2	12.6	12.6	12.4

※児童・生徒数は、平成 16 年度学校基本調査（平成 16 年 5 月 1 日現在）による。
（高等学校は、全日制の生徒数を記載）

Table 2 有効回答者数（学年・男女別）

	小 学 校		中 学 校			高 等 学 校			学 年 不 明	合 計
	5 年 生	6 年 生	1 年 生	2 年 生	3 年 生	1 年 生	2 年 生	3 年 生		
男	1,078	1,077	1,083	1,133	1,132	1,022	1,000	976	2	8,503
女	1,104	1,104	1,047	1,044	1,049	1,123	1,112	1,092	0	8,675
性別不明	6	7	19	18	24	16	16	33	0	139
合計	2,188	2,188	2,149	2,195	2,205	2,161	2,128	2,101	2	17,317

適応感」、「友人関係」、「将来展望」、「生活充実感」の 8 つの観点で構成。項目は、長崎県教育センター（2002）、安香ら（1989）、小嶋・松田（1999）、斎藤（1999）を参考に作成した。

結果と考察

1. 有効回答者数

質問紙を回収し、得られた有効回答者数の学年別、男女別の内訳は Table 2 の通りであった。回収率は、小学校が 95.4%、中学校が 95.2%、高等学校 92.9% であった。

2. 尺度の検討

2-1. 規範意識尺度の因子分析結果

全調査者を対象に、規範意識尺度について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量が |.40| に満たなかった項目を削除し、再び 5 つの下位尺度で因子分析を行った。因子分析結果を Table 3 に示す。

第 1 因子を「学校内逸脱行動」因子、第 2 因子を「違法・暴力行動」因子、第 3 因子を「迷惑行動」因子、第 4 因子を「遊び・快楽志向行動」因子、第 5 因子を「向社会的行動」因子と命名した。

各因子を構成する項目を合計し、項目数で割った平均値を下位尺度得点とした。いずれも得点が高いほど規範意識の高さを表している。

2-2. 生活関連意識の主成分分析結果

本研究では、生活関連意識項目については因子分析的手法は用いず、8 つの生活関連意識ごとに主成分分

析によって 3 つの成分を設定し、要約することとした。どの成分にも |.50| に満たない項目は削除した。以下は、8 つの生活関連意識要因の各成分である。

①家庭での生活・近所の人との関わりは、「近所の人とのあいさつ」、「家庭生活」、「近所の人の注意頻度」。②家の人への期待については、「積極的な関わり」、「大人としての態度」、「正当な評価の期待」。③先生への期待については、「正当な評価の期待」、「大人としての態度」、「授業」。④大人に対するイメージは、「大人としての評価」、「人間としての評価」、「時間の自由度」。⑤学校適応感については、「学校での満足度」、「将来のための勉強」、「校則のきびしさ」。⑥友人関係については、「友人関係の満足度」、「友人関係のわずらわしさ」、「友人の数」。⑦将来展望については、「将来の夢」、「社会的視点を含んだ将来展望」、「将来に対する不安」。⑧生活充実感については、「積極的活動・交遊」、「社会的活動や勉強」、「消極的活動」。ただし、以後の分析において使用しない成分もある。

また、各成分を構成している項目の評定値を合計し、項目数で割った平均値を成分得点とし、以後の分析に用いた。

3. 学年と性による規範意識の違い

学年と性による規範意識の違いを明らかにするために、規範意識下位尺度得点ごとに学年×性の 2 要因分散分析を行った。以下に得点ごとの結果を示す。

3-1. 学校内逸脱行動に対する意識

学年の主効果、学年と性の交互作用がみられた (Fig. 1)。このことから、学年が上がるにつれ男女とも規範意識が低下していくことが明らかになった。

Table 3 規範意識尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	I	II	III	IV	V
学校をさぼる	0.49	0.06	-0.05	0.24	0.06
提出物を期限内に提出しない*	0.63	-0.04	0.04	-0.06	0.02
髪の毛を染めて登校する	0.33	0.03	-0.09	0.46	0.02
授業開始のチャイムが鳴っても、席につかない	0.82	-0.17	0.18	-0.08	-0.05
授業中、私語をしたりさわいだりする	0.77	-0.15	0.21	-0.09	-0.08
授業中、無断でトイレに行く	0.74	0.02	0.03	-0.10	-0.01
授業中、マンガや小説などを読む	0.63	0.06	-0.09	0.23	0.02
授業中に、携帯電話を使用する*	0.53	0.16	-0.21	0.33	0.01
学校のものをこわす	0.54	0.29	0.04	-0.20	-0.02
学校内でお菓子を食べる*	0.23	0.00	-0.14	0.63	0.01
先生の指導を無視する	0.58	0.05	0.08	0.08	0.04
お店のものを万引きする	0.02	0.81	-0.01	-0.01	0.00
たばこを吸う	0.03	0.54	-0.04	0.33	0.00
人をおどして、物や金をとりあげる*	-0.06	0.95	0.00	-0.09	-0.01
無断で他人の自転車に乗る*	-0.01	0.63	0.19	0.03	-0.05
動物をいじめる	-0.07	0.45	0.37	-0.13	0.03
人に暴力をふるう	-0.03	0.53	0.33	-0.08	-0.02
友だちと一緒にカラオケやゲームセンターに行く*	-0.16	-0.16	0.23	0.82	-0.08
友だち同士で夜おそく外出する*	-0.11	-0.01	0.21	0.84	-0.02
点字ブロックの上に自転車をとめる*	0.01	0.09	0.51	0.13	0.07
人の気持ちを考えずに発言する	0.07	-0.02	0.65	0.07	0.02
ジュースの空き缶などを道路に捨てる	0.15	0.13	0.57	0.01	0.00
メールやチャットで人の悪口を書きこむ	0.05	0.10	0.55	0.11	0.01
他人の失敗を、笑ったりからかったりする	0.07	-0.03	0.65	0.12	0.03
ボランティア活動に積極的に参加する	0.01	-0.06	0.05	0.12	0.59
家の手伝いをする	0.09	-0.07	0.05	0.06	0.62
友だちのなやみを聞いたり、相談相手になったりする	-0.09	0.03	-0.03	-0.12	0.78
友だちに質問されたとき、その友だちがわかるまで教える	-0.04	-0.01	0.00	-0.09	0.74
電車やバスで体の不自由な人やお年寄りに席をゆずる	0.03	0.04	0.09	-0.02	0.58
I	(.89)	0.63	0.45	0.69	0.42
II	(.86)		0.56	0.47	0.44
III	(.83)			0.26	0.49
IV	(.82)				0.23
V	(.80)				

() 内の値は、Cronbach の α 係数

* は、小学生にはない項目

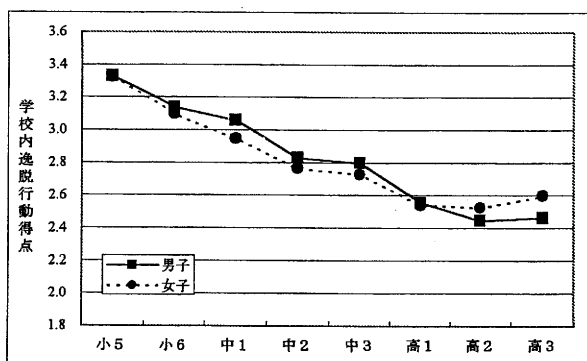


Fig. 1 学校内逸脱行動得点の学年・性別のグラフ

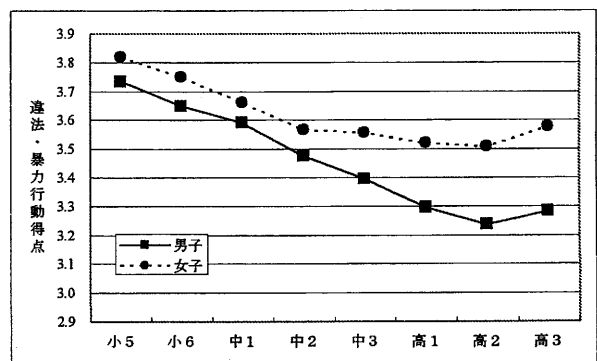


Fig. 2 違法・暴力行動得点の学年・性別のグラフ

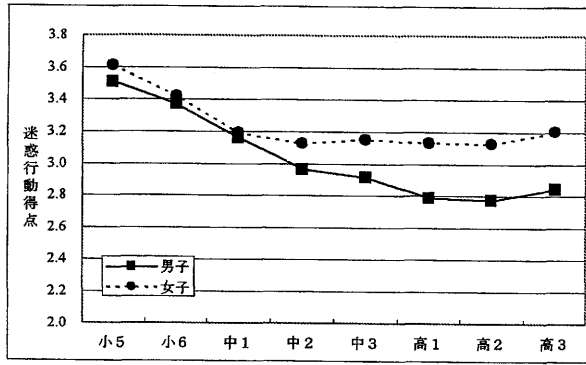


Fig. 3 迷惑行動得点の学年・性別のグラフ

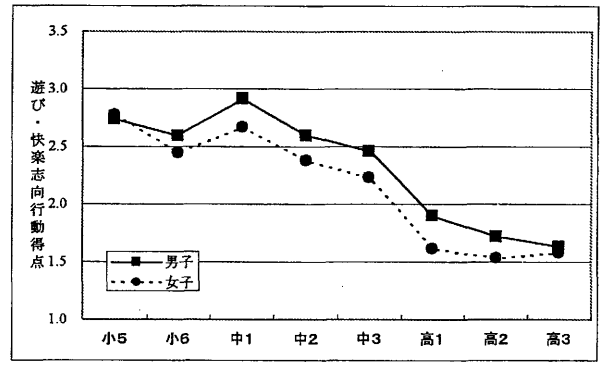


Fig. 4 遊び・快楽志向行動得点の学年・性別のグラフ

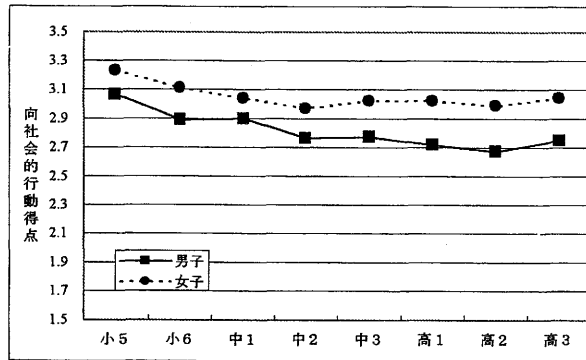


Fig. 5 向社会的行動得点の学年・性別のグラフ

3-2. 違法・暴力行動に対する意識

学年と性の主効果、学年と性の交互作用がみられた (Fig. 2)。男子は学年が上がるにつれ、意識が低下するが、女子の意識の低下は、中2までだった。

3-3. 迷惑行動に対する意識

学年と性の主効果、学年と性の交互作用がみられた (Fig. 3)。男子は学年が上がるにつれ、意識が低下するが、女子の意識の低下は、中1までだった。

3-4. 遊び・快楽志向行動に対する意識

学年の主効果、学年と性の交互作用がみられた (Fig. 4)。学年が上がるにつれ規範意識が低下していくことが明らかになった。ただし、他の規範意識よりも得点が低く、遊びや快楽を志向する行動をしてもよいと認知している傾向がみられた。特に、女子の意識の方が低かった。

3-5. 向社会的行動に対する意識

学年と性の主効果、学年と性の交互作用がみられた (Fig. 5)。学年が上がるにつれ、緩やかな低下がみられるが、大きな変化はない。つまり、望まれる行動は多くの子どもが「すべきだ」と思っていることを意味する。

4. 規範意識と生活関連意識の因果関係

生活関連意識と規範意識の関係を明らかにするため、「大人に対する態度」「学校生活」「将来展望」の3つの要因から規範意識に与える影響を表した因果モデルを作成し、パス解析を試みた。本研究では、中学生・高校生に実施した質問項目のうち小学生では実施しなかった質問項目が存在するため、小・中・高のデータ (データ I) を使用した分析と中・高のデータ (データ II) を使用した分析を行った。

4-1. 大人に対する態度が規範意識に及ぼす影響

児童・生徒の身近な大人に対する期待の高さや大人に誠実なイメージを持っていることが、彼らの規範意識に及ぼす影響を表した因果モデルを仮定し、データ I を用いて多母集団における同時分析を行った (Fig. 6)。想定した潜在変数は、「規範意識」「誠実な大人イメージ」「行動規範の手本の期待」「正当な評価の期待」の4変数である。これらの潜在変数を説明するための観測変数は、生活関連意識の成分得点、及び規範意識における下位尺度得点である。Fig. 6のように「規範意識」が「誠実な大人イメージ」「行動規範の手本の期待」「正当な評価の期待」のそれぞれから直接影響を受けるパスに加え、「行動規範の手本の期待」から「誠実な大人イメージ」を経由して「規範意識」への間接的な影響を表現したパスと「正当な評価の期待」から「誠実な大人イメージ」を経由して「規範意識」への間接的な影響を表現したパスを仮定した。その結果、得られたモデルは、GFI=.976、AGFI=.954、RMSEA=.037 と高い適合度を示した。

得られたモデルから、小・中・高校生とも「誠実な大人イメージ」から「規範意識」へのパスが認められた (小:.30, 中:.28, 高:.15)。このことから、一般的な「大人」に対するポジティブなイメージが規範意識へ影響を与えていることが明らかになった。同様に、「正当な評価の期待」から「規範意識」へのパスが認

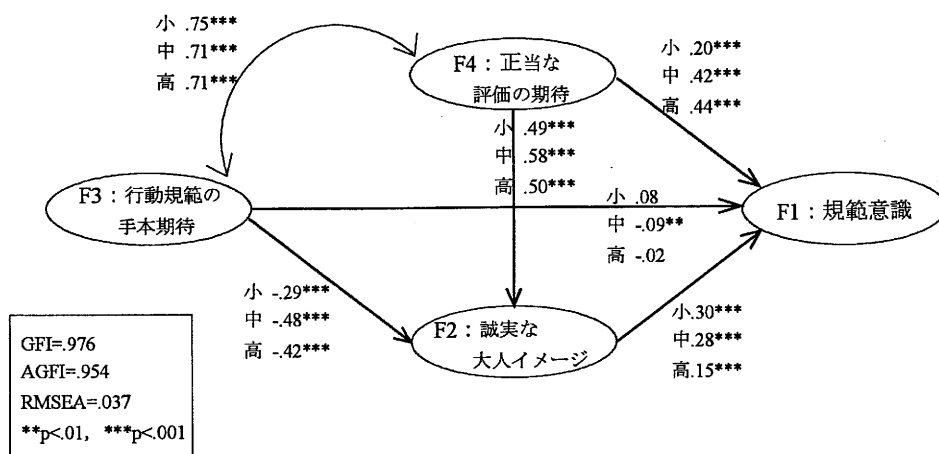


Fig. 6 大人に対する態度が規範意識に及ぼす影響

められた (小: .20, 中: .42, 高: .44)。よいことをしたときはほめてほしい、悪いことをしたらきちんとしかってほしいなど正当な評価を期待することが規範意識に影響を与えていることが明らかになった。その特徴は、学年が上がるにつれて強くなっていくということも示された。

4-2. 学校生活が規範意識に及ぼす影響

児童・生徒の学校生活での意識が、彼らの規範意識に及ぼす影響を表した因果モデルを仮定し、データⅠを用いて多母集団における同時分析を行った (Fig. 7)。想定した潜在変数は、「規範意識」「学校適応感」「先生への期待」「友人関係」の4変数である。これらの潜在変数を説明するための観測変数は、生活関連意識の成分得点、及び規範意識における下位尺度得点である。Fig. 7のように「規範意識」が「学校適応感」、「先生への期待」、「友人関係」のそれぞれから直接影響を受けるパスに加え、「先生への期待」から「学校適応感」を経由して「規範意識」への間接的な影響を表現したパスと「友人関係」から「学校適応感」を経由して「規範意識」への間接的な影響を表現したパスを仮定した。その結果、得られたモデルは、GFI=.925、AGFI=.887、RMSEA=.051と高い適合度を示した。

「規範意識」に最も大きな影響を与えているのは、「学校適応感」であった (小: .66, 中: .88, 高: .52)。つまり、学校生活に対してポジティブな意識を持っているほど、その子どもの規範意識は高いということである。また、「友人関係」と「規範意識」の関係は、友だちとの関係がうまくいっていると認知している小学生ほど、規範意識が高かった (.20)。一方、友人関係が良好であると認知している中・高生ほど、規範意識には負の影響を与えることが明らかになった (中:

-.39, 高: -.17)。しかし、中・高生は、友だちとの関係が良好であると認知しており、なおかつ学校で適応的に生活しているほど、規範意識が高いことが明らかになった (中: .46, 高: .17)。以上のことは、青年期初期の発達的な特徴や友人関係維持の仕方の特徴を考慮すれば、友人関係がよいことが必ずしも規範意識につながらないという結果として解釈できるかもしれない。しかし、友人関係が良好で、適応的な学校生活を送っている生徒の規範意識が高いということも同時に示されている。

4-3. 将来展望が規範意識に及ぼす影響

児童・生徒が、自分の将来や社会の将来に見通しを持っていることが、彼らの規範意識に及ぼす影響を表した因果モデルを仮定し、データⅡを用いて多母集団における同時分析を行った (Fig. 8)。想定した潜在変数は、「規範意識」「将来展望」「社会活動や勉強への志向性」「人間関係の豊かさ」の4変数である。これらの潜在変数を説明するための観測変数は、生活関連意識の成分得点、及び規範意識における下位尺度得点である。Fig. 8のように、「規範意識」が「将来展望」、「社会活動や勉強への志向性」、「人間関係の豊かさ」のそれぞれから直接影響を受けるパスに加え、「将来展望」から「社会活動や勉強への志向性」を経由して「規範意識」につながるパスと、「将来展望」から「人間関係の豊かさ」を経由して「規範意識」につながるパスを仮定した。その結果、モデルはGFI=.907、AGFI=.853、RMSEA=.074とやや高い適合度を示した。

中学生・高校生ともに「規範意識」に大きな影響を与えているのは、「社会活動や勉強への志向性」であった。つまり、社会的な活動や勉強に対して意味を見出している中・高生は、規範意識が高いということを意

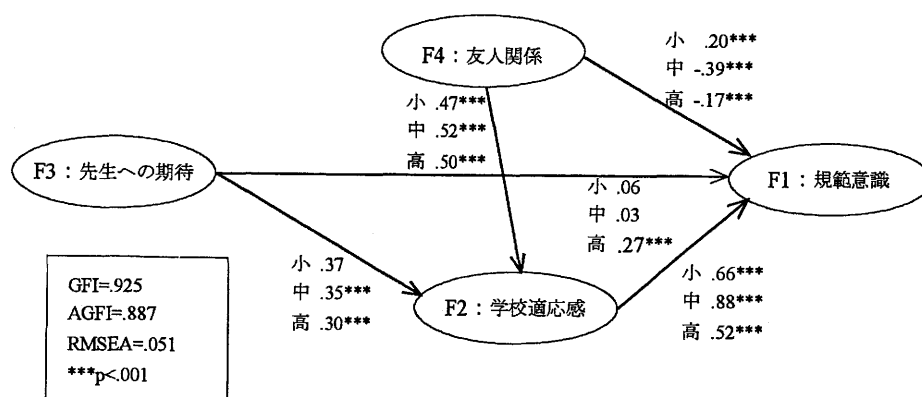


Fig. 7 学校生活が規範意識に及ぼす影響

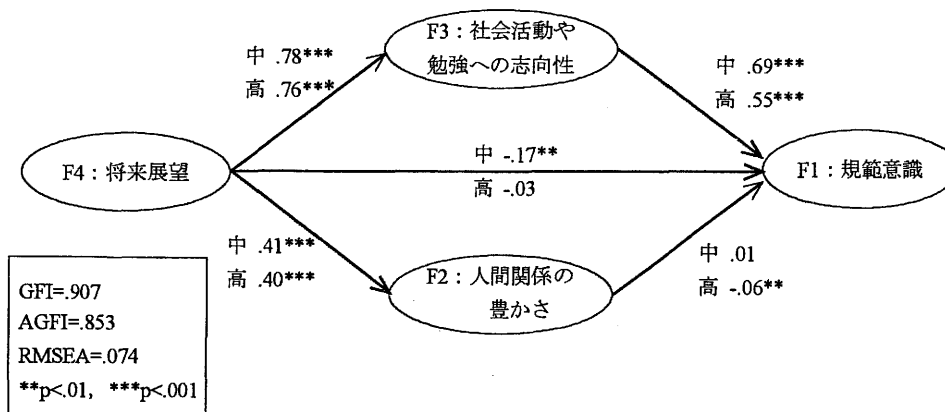


Fig. 8 将来展望が規範意識に及ぼす影響

味する。

また、「将来展望」が「規範意識」に直接与える影響は、中学生では、弱い負のパスが認められ（-.17）、高校生では、パスが認められなかった。しかし、「社会活動や勉強への志向性」を経由して、「将来展望」から規範意識に与える間接効果には、中・高生ともに正のパスが認められた（中：.54, 高：.40）。つまり、将来に夢や希望を抱いており、なおかつ社会的な活動や勉強に対して意味を見出していることが、規範意識に大きな影響を与えるということである。中・高生は進学や就職を考える時期でもあり、自分は将来何をしたいのかということを明確にするだけでなく、勉強が将来の役に立つことを意識させなくてはならないのだろう。

総合考察と今後の課題

本研究では、小学生・中学生・高校生の規範意識の

実態を明らかにするための調査を行った。その結果、児童・生徒の規範意識は、学年が上がるにつれて低下していくことが明らかになった。しかし、規範意識の種類によって、男子と女子ではその低下する様子が異なっていた。例えば、男子の規範意識の特徴は、違法行為や暴力行為に対して許容的であるが、女子は遊びや快楽を追求した行動に対して許容的であった。また、男女とも遊びや快楽を追求するような行為は、中学生から高校生にかけて、急激に意識が低下している。また、規範からの逸脱行為に対して許容的であるということは、その行為に実際及んでしまうことも、さらにはすでにその行為を行っている可能性も考えられる。このように規範意識の特徴を理解していれば、学校現場などでは広く活用できるだろうと考えられる。

次に、児童・生徒の規範意識は、日常生活の様々な要因から影響を受けていることが明らかとなった。特に、中・高生は、友人関係が良好であると認知していると規範意識が低かったのに対し、友人関係が良好で、

なおかつ学校に適応的であると、規範意識が高いという興味深い結果であった。同様に、社会活動や勉強に対して意味を見出していて、将来展望を持てることが、規範意識の高さにつながることも明らかとなった。これらは、青年期初期の複雑な心理状態の現れかもしれない。

以上のような結果は、学校現場にとっては、児童・生徒指導のあり方や方法について改善を進めていく手がかりとなり、社会的な生活場面において、子どもとの関わり方に貴重な示唆を与えるものであったといえる。

しかし、本研究ではいくつかの問題点を指摘することができる。まず第1に、規範意識に影響を与える可能性のある要因を特定するために、多くの概念を用い、小学生・中学生・高校生の生活意識について幅広いことがらについて問うているが、規範意識と関連があるだろうと予想していた生活関連意識についてその妥当性は十分に検討されていない。例えば「学校適応感」は、安香・田中・関・中村・笠井（1989）などを参考に5項目を抜粋したが、その5項目が本当に子どもの学校の適応度を測定しているかどうかの検討は行っていないのである。

次に、本研究は、子どもの規範意識の実態を把握するという目的であったが、大人の持っている判断基準と子どもの判断基準の間のズレを明らかにするためには、親や教師といった大人の規範意識と比較するべきであろう。特に、迷惑行為や、遊び・快楽を追求するような行為（友だちとカラオケやゲームセンターに行くなど）については、世代の差がありそうである。このような行為は、「人を殺してはいけない」というような自分の行動をコントロールするための明確な外的基準が存在していないため、現時点ですでに問題が指摘されている（吉田ら、1999 など）。

教師と児童・生徒、親と子ども、そういった世代やいわゆる「規範意識・常識」に大きなズレがあると考えた方がいい人間関係においては、いたずらに異世代の「規範意識・常識」を否定する傾向がある。とりわけ、子どもの問題行動が取りざたされるときには、例外なく大人の側による「子どもの規範意識の低下」といった指摘がなされる。しかし一方で、大人の規範意識も時代的には多く変化してきているのであり、さらに言えば、こうした大人の規範意識をモデルとして子どもの発達に方向付けられている可能性は少なくない。にもかかわらず、こういった異世代の「規範意識・常識」を過度に否定的に見る傾向があるということが、現実の学校教育や家庭生活の中の人間関係にネガティブな影響を与えているということも十分に考えられる。そういった意味においても、子どもを取り巻く大人の規範意識について実証的に明らかにしていくことが、

きわめて重要な課題となっているといえよう。さらには、規範意識の個人差を分析の視点に含めようとする研究視点を持つとすれば、子ども、親、教師間の対応が同定できるデータの収集が必須となるが、方法的、さらには倫理的にかなりの困難を伴っていることも確かである。

一方、子どもに対する発達支援的な視点をもったアクションリサーチも必要である。こういったアクションリサーチとしては、他者の不快な感情に気がつくことや、複数の個人からなる社会というものを考えようとすることを教育プログラムである、吉田・石田（2003）の「社会的迷惑認知」を教育するという試みや吉田・斎藤・石田・小川・坂本・出口・小池・廣岡（2003）のような「社会性や社会的コンピテンス」を高めるような授業プログラムの実施があるが、こういった規範意識の豊かな育成に向けた教育的試みが急務であるし、今後の子どもの発達を支える社会環境的な整備という意味においても、重要な課題になっている。

引用文献

- 安香宏・田中純夫・関真理子・中村奈緒子・笠井孝久 1989
児童における規範意識の構造とその関連要因 千葉大学教育学部研究紀要, 38, 1-29
- 安藤明人 1992 女子大生の規範意識に関する研究(3) - 反社会規範行為に関する性差について - 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 39, 63-70
- 安藤明人 1993 高校生の規範意識に関する研究(3) - 大学生との比較を中心として - 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 41, 63-70
- 原田唯司・鈴木勝則 2000 中学校における生徒・保護者・教師の規範意識の比較・検討 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 50, 267-283
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する - 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 長崎県教育センター 2002 長崎県児童生徒の社会性・規範意識に関する調査研究報告
- 小嶋佳子・松田文子 1999 中学生の暴力に対する欲求・規範意識、加害・被害経験、および学校適応感 広島大学教育学部紀要(心理学), 48, 131-139
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する研究(5) - 充実感尺度とエリクソン心理社会的段階目録との関係 日本教育心理学会発表論文集 第26回総会, 26, 478-479
- 関水しのぶ 2002 高校生と大学生の規範意識の研究 - 道徳的及び慣習的、個人的側面と多重基準の関係 - 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 9, 59-71
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集(文学部編), 24, 67-77
- 白井利明 1991 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連 心理学研究, 62, 260-263
- 高旗正人・國吉久美子 2001 生徒・教師・保護者の規範意

識と学校観に関する実証的研究 岡山大学教育学部研究
集録, 116, 117-130

横塚 裕子 1990 向社会的行動尺度(中高生版)作成の試み
教育心理学研究, 37, 158-162

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤
和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷
惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(心理学),
46, 53-73

吉田俊和・石田靖彦 2003 「社会的迷惑認知」を教育するー
中学校総合学習への導入 マツダ財団研究報告書, 16,
13-22

吉田俊和・斎藤和志・石田靖彦・小川和美・坂本剛・出口拓
彦・小池はるか・廣岡秀一 2003 「社会志向性」と「社
会的コンピテンス」を教育する(4) 名古屋大学大学院教
育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 50, 141-164

付 記

本研究の一部は、三重県児童生徒実態調査実施プロジェク
ト会議による、県内の小学生・中学生・高校生を対象とした
「児童生徒実態調査」のデータを再分析したものである。こ
の調査は、三重県教育委員会と共同で研究の企画や質問紙の
作成、調査結果の分析などが行われてきたが、本論文におけ
る分析や結果の解釈の責任は、すべて本研究の著者にある。